きた我々に対する報いともいえますが，できるならば，これ以上の開発をおさえて水草の生育する場所をそのままそっとしてやりたいものだと思います．

カラー写真が少ないのが少し痛いですね．このシリーズの趣旨からいっても，ページ数を減らしてもカラーページを増やして欲しいものです．

（田中次郎 Jiro Tanaka）

□中山 剛・山口晴代（著）：**プランクトン ハンドブック 淡水編** Takeshi Nakayama and Haruyo Yamaguchi: **The handbook of plankton in freshwater** 新書版（オールカラー）. 144 pp. 2018. 文一総合出版．¥1,800円＋税．ISBN 978-4-8299-8154-2.

小冊子ながら，今までの図鑑とあまりにも異なっているので度肝を抜かれます．何が違うって？あえて植物プランクトンとか動物プランクトンを分けてません．その理由は，プランクトンは植物とか動物とかに分けられない，というか，もっと多くの超生物界（スーパーグループ）に分けられてしまうからです．これほどマニアックな本見たことない．

「アーケプラスチダ」には，種子植物，緑藻，紅藻が含まれます．このグループの共通項は，古くに取り込んだ葉緑体をもつことです．この中には光合成能力を失ったものもあると書いてあり，その例として「ラフレシア」（寄生植物で世界最大の花をもつ）が挙げられているのが，あまりにもスッ飛んでいて面白い．

「オピストコンタ」には，ミジンコ類を含む全ての動物と菌類が含まれます．後方に鞭毛を生やしている輩です．

「ストラメノパイル」には，植物プランクトンの代表とも言われる珪藻や黄金色藻のヒカリモも含まれます．コンブやワカメもこの仲間です．前鞭毛の周囲に小毛が密集しています．

「アルベオラータ」には，原生動物の繊毛虫と，植物プランクトンでは珪藻と双璧をなす渦鞭毛藻が含まれます．いかにも原生動物という感じです．

「エクスカバータ」には，今脚光を浴びているミドリムシ（ユーグレナ）が含まれます．

「アメーバ動物」には，アメーバが含まれます．これは順当．

「リザニア」には，動物プランクトンの代表とも言える有孔虫，放散虫が含まれます．

以上順不同にあげましたが，これらと，原核生物の藍藻（細菌）の仲間が，それぞれまとまって解説されています．

イラスト検索が実にわかりやすく，図が秀逸です．本体部も全てごく自然なカラーなのでリアリティーがあります（最近では当たり前？）．

いくつか私にとって新鮮だったプランクトンの例を挙げます．

シアワセモ：4細胞という少ない細胞で遊泳する群体です．「四合わせ」と「幸せ」の両方を掛けています．良いネーミングですね．

アメーバ：これプランクトン？プランクトンネットで池を採集するといろいろな生物が入り込んでくるということです．

イタチワムシ：写真はとても可愛らしいですね．

襟鞭毛虫類（エリベンモウチュウ）：全ての動物の祖先と言われています．本当かい（半信半疑？）．

マニアックな種が多く掲載されているのは，著者（山口氏）が国立環境研究所の微生物系統保存施設の研究員であり，まさに地の利を得ている感があります．とにかく，本書は最新の生物系統，生物分類の知見に基づいた up-to-date な本です．出版されたのは大変嬉しいことです．

さらに，プランクトンと銘打っていますが「プランクトンっていうのは結局何なのだ」ということを考えさせられる読み物になっています．プランクトンとは，水界の極めて多様な小型生物群のことなんだとわかってきます．

将来プランクトン海域編が出版されることを大いに期待します．（田中次郎 Jiro Tanaka）